私たちはみな様の畑になりたい

特集 薩摩芋

明るいスーパーの一角、平積みされたコンテナいっぱいに野菜が溢れている。地元の農家が育てた野菜が並ぶ産直コーナーだ。その中に異彩を放つ野菜がある。ぴっしりと手書きの文字が詰まった白黒の紙が、野菜の袋一つひとつに入っている。そこには品種名と作り手一家を描いたイラストに加えて、品種の特徴やオススメの調理方法などが綴られている。書きたいことが多すぎて後半が詰まりすぎになった文字、主役であるはずの野菜の顔をかなり隠してしまう大きすぎる紙のサイズなど、一生懸命な不器用さが溢れ出ていて微笑ましい気持ちになる。

でこぼこ夫婦

この野菜を育てているのが福島県石川町で「笑平（しょうへい）でこぼこ農園」を営んでいる紀陸洋平さん（42）とその妻、聖子さん（42）だ。洋平さんは紙に描かれたイラスト通りで、黒光りするほど日焼けした顔には目尻の笑い皺が深く刻まれている。聖子さんはかなり謙虚な方なのか、イラストとは程遠い、細身で大きな瞳が印象的な美人だ。

「農家は普通、旦那が土作りとか力仕事をして、奥さんは収穫とか袋詰めをするでしょ。でもうちは俺も収穫しないと回らない。カミさんはカード書いたりお客さんと話したり。頭にくることもあるけど、変わって欲しいとは思わない。あいつの良さがなくなるから」と、洋平さんは割り切っている。野菜をつくる夫と、伝える妻。得意なことと苦手なことが全く違っていて、でこぼこな二人がどうしてここで農業をしているのか。出会いは 27 年前にさかのぼる。

調教

二人は埼玉で生まれ育った。といっても埼玉の田舎育ちの洋平さんは昔から父や叔父の農作業を手伝い、農業が身近にある生活をしていた。一方聖子さんは都会育ちで、農業とは無縁だった。同じ高校に進学するが、学生時代はほとんど関わりがなかった。卒業後同じ予備校に通うようになり、「一緒に勉強してたら付き合うことになっちゃった」らしい。当時は洋平さんの顔色を何ようように行動していた聖子さんだが、だんだんと“調教”が始まる。聖子さんに誘われて映画に行くとフィリピンの孤児についてのドキュメンタリーだったり、美術展に行くと原子爆弾についての展示だったり。デートといえばずっとこんな感じだった。

洋平さんは、「初めは『なんだこれー！』って思ったけど、だんだん面白くなってきたね。それまでは社会問題には全く関心がなかったけど、『へー、世の中こういうことがあるんだ』って思うようになった」と振り返る。ある日、韓国にある米軍基地についての映画を観に行った帰り、レストランで議論中に洋平さんがこぼした心無い一言が聖子さんの逆鱗に触れ、箸をバーンと置いて帰ってしまったこともあったという。聖子さんは昔から様々な社会問題に思いを馳せ、真剣に考える人だった。

額に汗して働く

1 年間の浪人を経て、洋平さんは東京農業大学に、聖子さんは新潟大学農学部に進学する。二人とも農学系に進学したのは偶然だった。洋平さんはダムや治水など、農業工学の勉強をしていたが全く興味が持てず、ほとんど学校には行かない、自称“農学部パチスロ学科”だった。

3 年生のとき、WWOOF（ウーフ）という農業体験制度を使って 1 年間オーストラリアの有機農家の手伝いをする。そこで重たい堆肥を一輪車で運んだり、外国人と競い合うように作業をしたりするのが楽しかった。昼間、目一杯体を動かして働き、夜は暗闇の中で眠りにつき、朝は小川の音で目が覚める。自分はこうやって額に汗して働きたいのだと気づき、帰国して大学を中退する。

就農資金を貯めるために給料が良い仕事を始めたが、農家になりたいと言いながらなかなか踏み出さないことにしびれを切らした聖子さんに、「そうやって先延ばしにしてたらどんどん遅くなるばっかり。こういうのあるから行ってきな！」と新規就農希望者向けのイベントを紹介される。そこで群馬県昭和村で高原野菜をつくる法人に興味を持った。今度遊びにおいで、と言われたので聖子さんと一緒に遊びに行くと、相手は面接のつもりだったようで、「紀陸くんは面接に彼女を連れてきた」と落とされてしまうのだが、来年から法人化しようと考えていた隣の農家を紹介され、無事に就職することができた。

群馬での農業

就職した法人は高原でレタス・小松菜・ホウレンソウなどの葉物をつくっている中規模農家だった。8ha の畑を管理し、1 年に 3 回転させるというスタイルだった。

【福島県石川町塩沢】

文＝成影 沙紀、高橋 博之　写真＝玉利 康延

10月8日

19℃